
あの日、 [リレー小説]

サークルO.L.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日、「リレー小説」

【著者名】

N1001N

【サークル名】
サークル〇・・・

【あらすじ】

過去に行くことのできる謎のボックスを手に入れた少年。
彼は
め未定。

ボックス発見！（前書き）

この作品はリレー小説で、

現在の参加者は（尖角・愛莉）です。

ただ今、参加者募集中であり、尖角から交互に書いていきます。

ボックス発見！

俺は目の前にあるものを眺めてみる。

今この瞬間、俺の目の前にあるのは、未来から送られて来たという謎のボックス。

それを俺が見つけたのは、今から三週間前のことである。

そして、俺はかれこれ三週間ほど学校に行っていない。

中学だから休んでも卒業できるし、何より面倒だったかったからである。

そんな理由を付けて休んでいるわけだから、担任から電話はかかるし、さらに家に“訪問”とか言って来やがるから本当にウザいとしか言ひようがない。

だが、幸いといふか、なんとかは知らないが、俺には親というものがない。

実際は母の方はまだ生きているが、毎日パチンコとか何とかで家にいないから、いないのと何も変わりはない。

とにかく、電話は電話線を抜いたからいいとして、訪問の方はどうしようもない。

だから、俺は暇つぶしのために家から少ししたところをウロウロしていた。

すると、見つけたのである。

場所は、公園のベンチの下。外見は、ただの紙袋。

しかし、なんだか紙袋は異様に膨れ上がっていて、その姿は『中身を見てください』と言っているように見えた。

だから、俺はその紙袋をベンチの下から上に置き直し、中身を見てみた。

すると、そこには、ダイヤルが五つとスイッチの付いているボックスと封筒に入った手紙。

俺はその封筒を開けて、中の文字を読んでみた。

すると、『いつやつその手紙は、田の前にあるボックスの取り扱い説明書。』

そして、そのボックスは最初のダイヤルから“西暦・月・日・時・

分”の順で数字を回しスイッチを押すと“過去に戻ることができる”という代物。

だから、“未来には行けない”。

それが、絶対的条件らしい。

だが、ここで気になることが一つあった。

それは、手紙の最後に書いてあつた言葉で、《私利私欲で使うのも良し、ただし、公にするでない》といつ言葉である。

だから、俺は考えてみた。

自分にとつての“欲とは何か?”といつことを

。

ボックス発見！（後書き）

では、一話田の愛莉さん、お願いします！！

謎（前書き）

担当・愛莉です。

ところで

そもそもこのボックス、本当に過去に行くことができるのだろうか。

誰かのイタズラである可能性も十分ある。

そんな非現実的なモノが存在するとは、到底思えないのだ。

それに、どうしてあんな場所に置いてあつたのだろうか。

中身を知っている人間が、あえてあの場所に置いたのだろうか。

誰かに拾つてもらつために？

とはいって、ただのイタズラで作つたにしては手が込んでいるし、重量感もすごいかった。

レトロな茶色いコーティング、ゴシック調の紋様が彫られている。

アンティークショップで売つていそうな感じだ。

まるで何百年も前に作られたかのような。

でもまあ、考えてビビりかかる問題でもないし……。

「「これは本当に過去に行けるものなんだ」とこいつはいつかいふ。

取りあえず、俺にとつて今一番同じものを考えてみる。

新作のゲームとマンガ。

高級な時計とかも持つてみたい。

あとは、学校に行かなくてもガタガタ言われない境遇。

わざわざ勉強しなくても高校・大学に行ける頭の良さ。

それに、可愛くて優しい彼女とか。

うーん……欲しい物はいろいろあるけれど、どれもこまつなげでない。

“欲” = “欲しい物” というわけではないのかもしれないな、と思いつつ直す。

というか「欲しい物を手に入れたい」という“欲”では、「過去に行ける」というボックスのポイントを全く生かせていないじゃないか。

「過去に行く」という観点から見ての“欲”を考えなきゃ……。

謎（後書き）

次回は尖角さん、お願いします！

欲（前書き）

担当代わりまして尖角です。

欲

そうだな……。

『過去に行くんなら、過去に使った金を取り戻すことはできるんだよな?』

『使う前に戻れば、使わないで済むってことになるんだよな?』

俺は、そう心で唱えてみる。

だから、この間ゲーセンで使った金を取り戻してみることにした。

数週間前に戻るし、同じことを繰り返すのは面倒だが、それで金が戻ってくるといつのならば過去に戻つてみる価値はあるか……。

そう思った俺は、四週間前、、、

すなわち、ボックスを見つける一週間前の時間に合わせる。

だが、ここで気になることが一つあった。

その気になること

それは、『過去の俺はどうなるのか?』『どの場所に飛ばされるのか?』といふことだ。

俺が過去に行くつていうことは、そこに過去の俺がいるつていうことだ。

しかし、普通は同じ時間に同じ人間は存在しないものだろう?

だから、その時間の俺の体は消えるのか?

それとも、そこに残つたままなのだろうか?

そして、俺はどこに飛ばされてしまつなのだろうか?

今の俺がいる場所なのだろうか?

それとも、過去の俺がいた場所なのだろうか?

はたまた、全然関係ない全く別の場所なのだろうか?

そして、俺はその真相が気になり、思いきつて『GO-』と書いてあるスイッチを押してみた。

田を開けたら（前書き）

担当・愛莉

田を開けたら

その瞬間、激しい光に包まれる。思わずギュッと田を開じた。

ボックスを強く抱きかかえ、身を固くする。

と、しばらくして何やら人の騒ぎ声が聞こえてきた。そつと田を開けてみる。

「……」

タイヤが道路をこする音と、壇にならない叫び声が響き渡る。

「危ねーだろ！ クソガキが！」

間一髪で俺を避け急停止した車の運転席から、オッサンの顔が覗く。

オッサンは鬼の形相で俺を睨むと、すぐに車を発進させた。

「うわ、ちょ、何だよコレー！」

見ると、俺は道路のど真ん中に立っていた。

慌てて歩道に入る。通行人たちが変なモノを見る田で、ジロジロと俺を見ていた。

「どうだ、いい……」

辺りを見渡す。大通り沿いにビルやコンビニなどの店が立ち並んでいるが、見たことのない場所だった。

「あの、すみません！」

近くを歩いていた大学生くらいの男を呼び止め、今日が何日かを尋ねてみる。

すると不審そうな顔をしながらも、男は今日が何日かを答えてくれた。

それは『GO-』ボタンを押す前、ボックスに指定した日付で間違いなかつた。

手の中にあるボックスに視線を落とす。やっぱりコレ、本物だつたんだ。

いやいや、問題はそれだけじゃない。

飛ばされた場所が道路のど真ん中とか、危険すぎるだろ！

危うく過去で死ぬところだつたじゃないか。

これは慎重に使わなければならぬと思いつつ、溜め息をついた。

取りあえず、ここがどこのか知る手掛かりでも探してみるか…

⋮
o

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1001z/>

あの日、 [リレー小説]

2011年12月25日12時50分発行